詰め込み式に漢字を学習させられた私たち大人にとって、漢字にはいいイメージがありません。漢字の書き取り試験のための勉強は苦痛でした。大人になって試験から解放されて初めて、漢字は楽しいということに気づく人も多いと思います。

ある出版社の編集者に聞いたのですが、ビジネスマン向けに漢字の本を出版したら10万部をこえるベストセラーになったそうです。また、この出版社では、やはりビジネスマン向けに『数学がわかる本』とか『数学オンチのための微分と積分』という本を出したら、これも 10 万部を超える売れ行きだそうです。

漢字も数学も試験があるから嫌いになってしまうのです。しかし、本当は漢字や数学の面白さを知っているのです。ですから大人になって、ちょっとややこしい漢字や面白い漢字に出会うと新鮮に感じられるのです。微分や積分の本が売れるのも同じ理由でしょう。今さら微分や積分を知ったからといって、仕事には何の役にも立ちません。昇格試験に出題されるわけでもありません。でも微分や積分の面白さはわかっているのです。

現在の小学校で行われている漢字教育では、漢字を好きになることはできません。100 人の子どもに聞けば、ほとんどが嫌いだと言います。たぶん好きだと言う子どもはいないでしょう。原因は一つです。漢字を書かせているからです。書くことにエネルギーをとられてしまい、漢字が読めることの楽しみを実感できないから好きになれないのです。

テレビで育った世代のお父さんやお母さんは、自分たちもあまり本を読まないから、漢字は不得手だという方も多いでしょう。生活の中でこれだけ漢字に囲まれていますから、多少の漢字コンプレックスもあるのではないでしょうか。そんなときに、自分も子どもと一緒になって漢字教育を始めるのは楽しいことです。

この本の後半に出てきますが、漢字の成り立ちを知ること、“かんむり”や“へん”の持つ意味を知って漢字を見ると、面白くなってきます。親も興味を持って漢字と接し、その気持ちを子どもに伝えながら一緒に学習して行くと、子どもの漢字への興味もわいてきます。自分でその喜びを知ろうとします。文字の形を見て推理する能力も養われてくるのです。

漢字を覚えて読書の喜びを知った子どもは、自分で解決しようとする能力や自主性が育っていくのです。自分で考えるよいトレーニングにもなります。そのためには漢字は早くから読めたほうがいいのです。

私はこの本を通じて、親と子が一緒になって楽しく漢字を学んで欲しいと思っています。

漢字は読むものであり、遊びであると思えば、今までの漢字に対するイメージがまったく違うものになってくるのではないでしょうか。